

風が吹く、笑顔が咲く。

中学三年

K・A

森の中をひたすら歩く。せつかくお母さんに買ってもらった新しい浴衣は土で汚れてしまった。このまま帰ったらきつと親に叱られるだろう。

そもそも何でこんな山の中を歩いているんだっけと私は記憶を辿った。今日は年に一度地域で行われている夏祭りの日だった。夕方になり、浴衣に着替え夏祭りがある神社へ向かった。その神社は山の中にあり、周りの森は鬱蒼としている。そこで迷って帰れなくなった人が何人もいるくらいだ。そして私はその森に迷い込んでしまった。でも肝心のここに迷い込んだ理由はわからない。山道からどうやってここに来たのか覚えていないのだ。その間の記憶がすっぽり抜けている。いつものように神社に向かって歩いていただけなのに。それにここがこの山のどのあたりなのか見当がつかない。幸い満月のおかげで周りの様子は少しだけわかる。だけど周りがわかったところで前も後ろも右も左も草と木しかない。まさに八方塞がりだ。

でももう迷い込んでしまったからには仕方がない。とにかく山のふもとに向かって歩くしかない。浴衣の帯が木の枝に引つ掛かって破ける。足が木の根に引つ掛かり転ぶ。髪飾りはどこかに落としてしまい、髪はもうぐしゃぐしゃだ。それでも私はひたすら暗い森の中を進む。

どれくらい歩いていたのだろうか。もう二、三時間は歩いた気分だ。本来ならもうどこかの町に出てもおかしくないはずだ。それなのにまだどこ見渡す限り森しかない。もしかしてもう私はもう家に帰れないのだろうか。ここにきて急に怖くなってきた。鳥肌が止まらない。足がすくむ。怖い。

その場に立ち止まっていると、目の端が光源をとらえる。その方向に振り返ってみると、森の少し奥から明かりが漏れているのがわかる。耳を澄ますと、かすかにお囃子のようなものも聞こえる。もしかして祭りの会場に戻ってこられたのだろうか。さつきまでの怖いという思いはもう消え、今は期待の二文字だけが頭の中を埋め尽くす。私は少しずつその祭りの会場へ向かって歩みを進める。だんだん屋台の掛け声みたいなものも聞こえてくる。その時だった。

「ああとそこのお姉さん！ 一旦止まって！ 止まってえ！」

「え？」

急に男の子の声が聞こえて振り返ると、そこには私と同じくらいの青い甚平に面布をつけていて顔がよく見えない男の子が木の上からこちらを見下ろしていた。

「ああ良かった気づいてくれて。やっぱりもっと早く声かけるべきだったか？」

その子は暢気にそれを言うと、かなりの高さがある木の上から飛び降りて何事もなかったかのように頭に着いた葉を払う。そういえば、もっと早く声をかけるべきだったと言っていたが、しばらく前からずっと私の後をついてきたということなのだろうか。でもずっと歩いていて人影のようなものは何も感じなかった。木の上にいることといい、ずっとついてきていることといい、この子は何者なんだ。

「えっと……」

「いやあ。ごめんごめん。やっぱり一人でここまで歩かせたのは酷だったかなあ。でも、こんなに一人で耐えられた子はそうそういないと思うぜ？　すごいすごい！」

「あの……君は一体……」

「俺の名前？　うーん、そうだなあ……　じゃあロウでいいよ！　ああ、それが一番覚えやすいな」

そういつてこのロウと名乗る子は一人でうんうんと頷く。何だか一人で勝手にしゃべり続けてしまいそうな気がする。そしてロウはこちらの問いかけを理解していない。私は君の名前じゃなくて何者かを聞いているんだ。

「あの！　名前じゃなくて私が聞きたいのは、君は誰なのかとどうしてここにいるのかとかで……」

「ああ、なんだその事か。だったら最初からそう言えばいいのに。俺はこの山を守っている人。この山にはお姉さんたちとまた違う生き物？　みたいなのが住んでいて、その生き物とお姉さんたちが出会ったら面倒くさいことになっちゃうからそれを防ぐために俺たちがこうやってるんだ。今はお姉さんがこの森の中に来ていろいろ歩いているうちに変な生き物たちがやってるお祭りまで迷い込んだじゃったみたいだから、俺が助けに来たってわけ！」

「へえ、なるほど……？」

「よし！　じゃあしつかり君の質問に答えたことだし、この山のふもとまで俺と戻るか」

「えっちよつと待って！　じゃあ君はずつと前から私を追いかけてきたってこと？」

その質問は聞こえていないのか、ロウはその祭りの方角とは逆の方へ歩いていく。

私も後を追いかけようと歩き出すも、足が痛くて動かそうにも動かせない。どうやらいつの間にか足にくじいてしまったらしい。

「あのう！　足が痛くて動かないんですけどお！」

「は？　嘘だろ？　ちよつと見せろ！」

ロウはそう言ってこちらにかけてくる。

彼はすぐにこちらに戻ってくると、私の足元をのぞき込んでくる。

「ああこれは痛そうだなあ。じゃあ俺の背中に乗ってく？」

「？ 背中って？」

「おんぶだよ！ お・ん・ぶ！」

「ええ？ おんぶ？」

この年になっておんぶは少し恥ずかしい。しかも相手は私と同じか少し背が低い。本当に私をおんぶできるのか？

「何その反応。もしかしておんぶされるのが恥ずかしいのか？」

「いや、足痛めているし仕方ないかなあ」

「よし、じゃあはい。後ろ乗って」

私は痛みを感じないようゆっくり彼の背中に乗る。

「じゃあ、せっかくだしこのまま走っていくかあ」

ロウはそういうと、ものすごい速さで走り出した。風が当たり、髪がなびく。

「えっ早くない？ 大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫！ これくらい余裕だから！」

走っているうちにまだ木は多いがだんだん森が開けてきた。もうすぐこの森から出られそうだ。そんなのんきなことを考えていると、彼は突然私を草の茂みに投げ飛ばした。

「ちよつとごめん！」

「はあ!?!」

背中全面に痛みが走る。視界が葉のせいでも悪い。私はどうしてこんなことをされたのか分からずとりあえず起き上がろうと地面に手をつく。その時、誰かの舌打ちとロウのような声が何かよくわからない呪文のようなものを唱え始めた。ゴオツと強い風が吹く。そしてすぐに、何か大きな動物のようなもののうめき声も聞こえる。その声はとても聴いていられるようなものではなく、私は耳をふさぐ。もしかしてこの声の主が、さつきロウが話していた生き物のことなのだろうか。とてもじゃないが私が聞いたことのある声ではない。

しばらくすると辺りが静かになり、私は茂みの中からゆっくり顔を上げる。ロウは何かを服の中にしまいながらこちらの方へ来る。

「ごめんなあ、いきなりあんなことして。ちよつとやばいものが出てきたから相手してたんだ」

「やばいものって何？ 私も知っているようなものじゃないの？ それにさっきの呪文みたいなのは？ あれあなたが言ったの？ というかあなた本当に何者？」

「いや、いつぺんに言われてもどれから答えていいかわからないし。それに今の

ことは何とというか、お姉さんに話せるようなことじゃないし……」

「でも見ちゃったんだから答えなさいよ！ ねえ！ 聞いている？」

「あつなあなあ！ ほら！ あそこ！ あつちからなんか声が聞こえる！ ほら！」

彼はそんなに話をそらしたのか、山のふもとであるはずの方を指さす。私は質問に答えられていないことを不服に思いながらも、渋々そちらの方に耳を澄ます。すると、さつき聞いた御囃子の音とはまた違う、人が騒いでる音が聞こえる。

「本当だ……」

「だろ？ ほら、ちゃんとここまで送り届けてやったんだからあととは自分で行けよ？ さつきまで負ぶってたんだからゆっくりなら歩けるはずだし」

彼はそういうと私の足元を見る。確かに、少しずつなら歩ける気がする。

「ありがとう。でもまだ私の質問答えてないよね？」

「それは……」

「冗談、冗談、私のこと助けてくれたのは感謝してるし、別にもう答えなくてもいいよ」

「そうか。じゃあもうお別れだな」

「うん。今まで本当にありがとうね」

「ああ、それじゃあ」

優しい風が吹き、彼の面布がなびく。そんな彼に背を向けて、私は神社の参道に向かつて歩き出す。盛り上がっていきそうな声を聴く限り、どうやら夏祭りが終わるまでまだまだ時間はあるらしい。少し格好はおかしいけれど、このお祭りを楽しむことには関係ない。さて、何をしようか。これは、少し不思議な体験をした私の夏祭りの御話だ。

「で、オリはなんでずつといるの？」

「あれ？ ばれてたか。やっぱリロウには敵わないなあ」

「当たり前だろ。とか何か何でさつきあいつの相手してくれなかったんだよ！

あの大ききの殺すの結構苦労したんだぞ！」

「いやだってこんな特別な日に女の子と二人きりなんてさあち

よつと期待しちゃうじゃん」

「何期待してんだよ！ 俺たちが人間とそういう関係になることなんてないだろ!!」

「まあねえ」

「ほら、早く向こうに戻るぞ」

俺はオリのからかいに少し怒りながら走りだす。

「ねえねえ、さつきみたいに僕のことを負ぶってよ」

「嫌だ！ お前走れるじゃねえか！」

「いやまあそれはそうだけど」

オリはその一つにまとめた長い灰色の髪を揺らしながら走る。あいつは俺よりも妖術に関する能力が高い代わりに、体力とか足の速さとかが俺よりも劣っている。でもまあそれでも、普通の人間よりは何倍もできるだろうけど。

「そういえばなんでお前あっちの見回りしなくていいのか？」

「ああ、うん、さつきロウが倒してくれた奴が一番やばかったっほくて、ほかは別に気にするほどでもないと思う」

「は？ じゃあ本当に何であいつのこと俺一人でやらせたんだよ!!」

「まあまあまあ。でもロウが一撃で倒せるくらいの強さだったじゃん」

「…… 確かに」

ただいつものように山を登る。今はもうさつきまで聞こえてきた祭りのざわめきはなかったかのように静かであた俺たち二人の走る音だけが響く。

「あ、ロウそこに落とし穴あるよ」

「はえ!?!?」

オリの警告が言い終わるか終わらないかのうちに、視界がいきなり地面に近くなる。下を見ると、ちょうど腰辺りまで、落とし穴のようなものにすっぽり嵌っている。

「なんだこれ……」

「どう考えても『落とし穴』でしょ？」

そういうながら、オリは俺に手を伸ばす。俺はその手を取り落とし穴から抜ける。

「でも俺が落とし穴を見落とすなんてことないよなあ」

「しかも僕だけがわかるなんてこともそんないし」

俺は動体視力が良く、何か道端の障害物を見つけたことが多い。しかし今回は妖怪とかにやたら詳しいオリだけがこの落とし穴に気づいた。つまり、

「妖術か」「妖術だね」

二人の声が重なる。こういうことはよくあるので、俺たちは何事もなかったかのように話を続ける。

「まあ、だよなあ……」

「どうする？ とりあえず犯人探す？」

「…… ああ」

「あれ？ ロウ君あんまりやる気がない感じ？」

「いや、さつき倒したあいつで結構疲れたから探すのだるいなって……」

「なるほどねえ。じゃあ僕一人で探すよ。さっきの落とし穴の感じは多分、子供が作ったものだろうし」

「おう。ありがとな」

そう言つてオリは近くの少し開けた場所で仁王立ちになる。そしてあいつほどの言語とも言い難い、人間が喋れるようなものでない文章を唱え始める。強い風が吹き草木が大きく揺れる。その中で唱えてる自分からはいつもの声に聞こえるのに、ほかの人からは不気味な声で聞こえるなんて不思議だよなあとも思う。

そんなことを考えているうちに後ろの方から不自然に葉が揺れる音が聞こえる。後ろを振り返り音がした方へ歩く。そして俺は草の茂みの中に手を突っ込む。何か髪の毛のようなものの感触が二つあるので、俺はその丸いものを両手でつかみ、ぐつと上に引つ張る。持ち上げると片方は肌が赤く、もう片方は青い肌をしている二本の角が生えた五十センチほどしかないそれが手の中にあつた。

「お前ら…… 小鬼か？」

そいつらはぎゅつと目をつむりながら両手で耳をふさぎ、何かからおびえているようだった。どうやら茂みの中から取り出されたことにすら気づいていないらしい。

ああそうか、と俺はオリのことを思い出して後ろを振り返る。

「おい、オリ！ もう見つかつたぞ!!」

かなり大声で叫んだがあいつには届いていないらしい。俺は小鬼たちをつかんだままオリのすぐそばまで歩いていき、こぶしでその頭を殴る。

「つたあ!?! なになになに?」

「見つかつた!! 犯人!!」

「ああ、そういうことね。ごめんごめん、僕またやっちゃつた?」

その質問に俺は大きくため息をつく。

「いい加減その妖術に没頭するのやめてくれ」

「で、その今手に持っている子たちが犯人?」

オリは俺の注意を無視して聞いてくる。二匹の小鬼はその不快な音がやんだことに気が付き、ゆっくりと目を開ける。するとその途端、

「ひゃああああ!!!」

と大声をあげる。泣き顔にも驚いた顔にも似つかない表情をしている。どうやらまだ今いる状況を理解できていないらしい。

「おい、お前らいいか? いくつか聞きたいことがあるんだけど」

「ひえ、あの、殺すのだけはやめてくださいいいいい」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「おい！！ 話を聞け！！！！」

「は、はい！！！！」

やっと黙った。

「お前ら俺たちの質問が終わるまで逃げないな？」

二匹は首がもげるんじゃないかぐらいの勢いで頷く。それを確認した俺は彼らを地面に卸して座らせる。本当に怖がっているらしく、正座したまま時が止まったかのように静止している。

「で、まずあの落とし穴を仕掛けたのはお前らだな？」

「は、はい。今日人間たちも夏祭りがあるって知って、落とし穴を作ったんで：

…

赤い方が怯えながら答える。

「それであんな妖術をかけたのか？」

「はい……。もし人間が引つかかったら脅かして遊ぼうって考えてたんです」

「でもしたらお兄さんたちが引つかかって……」

青い方と赤い方が交互に答える。俺はまた大きなため息をつく。

「あのなあお前ら、こんな上の祭りに近いとこに落とし穴作ったら人間じゃなくて俺たちよりもっとやばいやつらの方が集まりやすいに決まってるだろ？」

「……」

二匹は何も声を発さなくなった。何か言ってくればこちらも話しやすいのに。

「ああもうそんな風に問い詰めたら怖くなって何も言わなくなるに決まってるでしょ。ロウちよつとどいて」

そういつてオリは俺の肩を押し突き飛ばす。「どいて」のどかし方にしては強すぎるんじゃないか？ 若干よろけながらオリの話を聞く。

「で、君たちはこのお祭りに遊びに来た子たちなの？」

「そうです。お祭りで遊んでたけど飽きちゃって、それでこの落とし穴を作ったんです。最近周りから妖術を習い始めて試しにそれにかけてみたんです」

青い方が落とし穴を指さしながらさつきより安心した感じで答える。やっぱ俺の言い方は怖かったのだろうか。

「なるほどねえ。だからあれにかかった妖術はあんなにわかりやすかったんだ」

「おい、ちよつと待てよ。それってつまり俺が落ちる前からそこに落とし穴があることに気づいていたってことか？」

「うん、そうだよ。それでロウでもさすがにあれには気づくかなあって思ってたから、全然気づかなくて。流石に僕も少し焦っちゃったよ」

「はあ？ それは俺があの時少し疲れていただけでいつもなら気づいていた

し!!!!!!!!!!」

「ロウは妖術をかける方ならだいたい上手くなったのに、見破る方はまだまだだよなあ。」

「うるせえ!!!!!!!!!!」

俺はオりに殴りかかろうと一步を踏み出すが、それを阻止するようにオりは話を続ける。

「話を戻そうか。その落とし穴を作ったのはここだけ？」

「はい。僕たちの体だと一つ作るのが精いっぱい」

「そっか。じゃあもう僕たちから聞くことは特にないか？それにもう十分反省してるっぽいし、落とし穴の穴を埋めたらもうお祭りに戻りな。ロウもそれでいいよね？」

さっきのオリとの会話で不貞腐れたまま俺は答える。

「ああ、別にそれでいいよ」

「はあい。それじゃあ二匹とも……」

「あ、あの！ 少しお兄さんたちについて聞きたいんですけど……」

赤い方が急にそういった。青い方はそんなことを言い出した赤い方を驚き顔で見つめる。

「え？ 僕は別にいいけど……」

赤い方が話を続ける。

「えっと、お兄さんたちって人間じゃないんですか？ 見た目は人間みたいなのに……」

何を言い出したのかと思えばそんなことだったのか、と俺もオリも思い二人で顔を見合わせる。この手の質問なんて冗談抜きで百回は聞かれていると思う。

「なんだその事ね。僕たちは簡単に言うところの山の頂上に人間が来ないように置かれた、山の番人みたいなもの」

『山の番人？』

「そう。この山には今日みたいに関んな妖怪がいたり、普段の山道に妖怪が現れたりするでしょ？ それで迷子になった人間がこの妖怪がいる場所に入ってきたら困るから、僕たちがその人間たちの道案内をしてるの」

俺は暇なので、近くの落ち葉の葉脈を残したままちぎる遊びを始めた。ずっと前からやっているがこれ、なかなか難しい。

「なるほど……。それで結局お兄さんたちは人間じゃないんですか？」

「うーん。人間かそれ以外かで言ったらそれ以外の方かなあ。僕とあっちのロウはこの山に小さい頃にここに来て、この山の妖怪に育てられて今こうやって妖術が使えたり早く動けたりしてるんだ」

「まあ俺は全然妖術使えないけどな」と心の中で付け足す。

「そうだったんですか」

「うん。質問はそれだけかな？」

「はい、それじゃあ僕たちあの穴埋めてきます」

「はい、よろしくね。そのままにしてまたロウが落とし穴に引っ掛かったりしないようにしてね」

「誰がまた引っかかるって言った！！！！」

俺は大声でオリに叫んだ。二匹の小鬼は一瞬ビクツと肩を震わせながら落とし穴を埋める作業に取り掛かる。

「それじゃあ僕たちはもう行くね。他に人間が迷い込んでた

道案内しなくちゃいけないし」

「はい。さっきはあんなことをして、本当にごめんなさい」

小鬼たちは俺たちに向かって頭を下げる。

「もうこんなことするなよ」

「じゃあ、二匹とも頑張ってね！」

そういつて俺たちはもうすぐそこまで来ている祭りの会場に向かった。

この祭りはここらにあるいくつかの山に住んでいる妖怪たちが集まって人間的のまねごとをした、ちよつとした集会の場みたいなものだ。出店は、参加した妖怪それぞれで用意した店を出す。いつもは俺たちしかいないこの場所に活気が出る年に一度の催しだ。

「なーんで俺たちはこんな楽しそうな日に祭りに参加できないんだろ。俺たちがこの山を守ってるみたいなものに」

「仕方ないでしょ。僕たちの役目は妖怪と人間が出会えないようにすることなんだから」

「まあな」

祭りの周りをぐるぐる周りながら散歩する。

「あーあ、今日はここ最近で一番疲れたかもしれないな」

「人間の女の子を今日一番の妖怪倒しながら案内して、小鬼たちに説教？ な

かなかなあ」

「しかもお前ほぼずつと俺のそばにいたじゃん。お前は自分の仕事をしろよ」

「まあまあ今日は特別な日なんだし良いじゃん」

「だからなおさらちゃんと仕事しろって話だろ！！！！」

さっきまで桃色がかっていた空はいつの間にか藍色ですべて塗りつぶされている。雲一つないきれいな空だ。

「なあ、少し下がって星見に行かないか？」

「星？ 確かにこんな天気だし良いかもね」
「じゃあ決定だな！」

『いっせえのーっ！』

「うわあああ……！！」
「すごっ……」

あれから祭り会場から少し離れた木があまりない場所へ行き俺たちは顔につけていた面布を取り、しばらく目をつむり目を慣らしたあと俺らは満天の星空を見た。それはどこまでも無数の星が輝いていて、綺麗という言葉以外の感想が見つからない。

「すごいよなあ、こんなに空が光っているなんて」

「何それ、どういうこと？」

「あんなに光り輝いていてその上綺麗なものが自然の中にあるなんて、不思議だよなあって」

「なんとなくわかるような、わからないような……」

「だろうな。俺が喋ったりするの得意じゃないっていうのはオリはわかってるだろうし」

「当たり前じゃん。何年一緒にいると思ってるの？」

そういつてオリはこつちを向き、にこりと笑う。

「……なんだよその顔」

「いや、ロウ今可愛いなって」

「はあ！？ なんだよ可愛いって……！！ 訂正しろ……！！……！！」

「え…… だって本当のことなんだもん」

「本当のことじゃないだろ……！！ おい！！ 何恥ずかしがってんだよ……！！」

「それはロウの方じゃない？ 顔赤いよ？」

「うるせー……！！……！！……！！……！！……！！」

俺はオリの甚平の襟をつかみ殴り掛かる。それでもまだオリは笑っている。その長い前髪のせいでもあるが、本当に何を考えているのかわからない。

優しい風が俺たちの頬を撫でる。そうやってこの暑い夜が過ぎていく。祭りなんて俺達には関係ない。ただただいつもと同じでオリと時間をつぶすだけだ。もうすぐ明日がやってくる。

さて、明日は何をして過ごそうか。

珍しく朝早く起きた俺はいつもの甚平に袖を通し、家を出る。まだ日は高く昇ってないが今日も雲一つない晴天になりそうだということはわかる。少し山を

登り、昨日の祭り会場だった場所へ向かう。

頂上にある少し開けた場所は昨日までの賑わいはなかったかのようにまっさらになっただけだ。

「いやあこれもまた夏の風物詩みたいなもんだな」

夏祭りの出店本体は妖術を使って建てているものが多く、術を解かれた後の今はもう何も残っていない。毎年祭りが終わるとここは何もない更地になり、次の祭りが来るまではまた草や花が茂る。そして夏祭りが近くなるとそれらの植物は抜かれそこに出店が並ぶ。

俺はその真ん中にそびえたっている大きな樹木のそばに寄る。このとても大きく頑丈な木はこの山を守っている一種の神様のようなものらしい。風の神様だと前に誰かから教えられた気がする。この木がいつからここにありこの山を守っているのかはもちろん俺もオリも知らない。

「まあ、守ってるって言っても結局妖怪を退治してるのは俺たちなんだけども
あ

その大木は俺に対して反対の意を示すかのように風でゆさゆさと大きく揺れる。その幹を俺は一回こつんとこぶしでたたく。

「あれ、ロウじゃん。おはよう。今日は早起きだね」

オリが目をこすりながら歩いてくる。

「おはよう。なんか昨日の星が綺麗過ぎたからなのか早く目が覚めてな、せつかくだし祭りの跡でも見に行こうかと思って」

「なるほどね。それにしてもこの木、相変わらず大きいよなあ」

オリはその木にやさしく触れる。

「本当にな。いつからこの山を守ってきたのか今考えてたんだ」

「確かにいつからここにいるんだろね。千年くらいかな？」

「なあ、それよりも早く朝飯食おうぜ。早く起きたからもう腹がぺっこぺこでさ」

「もう、そうやって勝手に話を変えないでよ」

「早くいくぞ！」

そういつて俺は笑いながら駆け出す。後ろからオリの文句を言う声が聞こえるが、気にせずに走る。

「あー！もう蔵の整理疲れたー！ー！ー！」

「そんなこと言っていないで早く荷物運んで」

「えー！ー！ー！」

ここは俺たちが住んでいる家からすぐ近くにある蔵のようなところだ。この中にある書物や大事そうなものが防犯用の妖術がかけられたままなのか確かめるためだ。今日はここ最近で天気がかなりいいので二人で朝飯を食った後から

ずっとやっている。

「ええっとこれは？　ちゃんと妖術かかってんのか？」

「それはかかってないね。こっちに頂戴」

そういつてオリはその本をひょいっと手に取り外へ向かう。「はあくく？　なんでわかるんだ？　？」

「そんなの真面目に妖術習ってればすぐにできるよ？」

「ああはいはい、そのことはもういいよ」

「じゃあロウはその本運んでおいて」

「りようかい」

ロウが指した十冊ほどに積み上げられた本の一つを手取る。表紙には縦書きで何か書かれているが、あいにく字は読めない。こんな本を保管して何か意味はあるのだろうか、と考えながらそれを両手で抱える。ただ紙が積み重なっているだけなのにかなり重く、背も高いため前もなかなか見えない。ゆっくりと歩きながら外へ向かう。

慎重に歩きやつと外に出たその時、安心したからなのか地面に落ちている小さな小石に躓き盛大に転んでしまう。持っていた本も俺の頭に当たりながらすべて地面に落ちる。本の角が当たり、とても痛い。

「痛ったー！ー！！」

「え!?　ちよつとロウ何してるの!!」

「ごめんごめん。そこで躓いて」

「もう、いくつかに分けて運べばよかったのに」

そういうながらオリは一冊一冊散らばった本を拾っていく。俺も拾おうと思ひ、近くにある本から拾っていく。

「あれ、なんだこれ」

開かれて落ちていたその本は中身に何も書いていない。こんな本、見たことがない。

「あつちよつとロウ、その本あんまり開かないで！」

急にオリがそう言い、俺が持っていた本を奪う。その様子はとても慌てているようだった。

「おい、急にどうした？　そんなにその本大切なのか？　何も書いてなさそうだけど……」

「いいからいいから！　この本のこととはもう忘れてあつちのものの中に運んで！」

「お、おう……」

オリはその本を抱え、そそくさと向こうへ行ってしまった。これ以上問い詰めても仕方なさそうなので、俺はさつき言われたものを蔵の中へ入れていく。あの本はいったい何なのだろうか。オリも俺も、この蔵についてはあまり詳しくない

はずなのに。

夕方、ちょうど夕日が西に沈みかけたころ蔵の中での作業もほぼ終わっていた。

「ああなんでこの片付けっていつもいつもこんなに時間がかかるんだよお！」

「それはねロウ君、君が妖術を見分けられないからだよ」

「お前そういうこと言うなよお。…… まあ、その通りなんだけど」

なんて駄弁つっていると遠くから草を踏む足音が聞こえてくる。

「あれ、何か聞こえないか？」

オリに話しかけるもあいっは作業に集中して聞こえなかったらしい。わざわざ作業を中断させるほどでもないなと思いつ俺は一人でその方向へ走っていく。案内近くにいたらしく、すぐにその姿を目視できるようになる。背が低く黒い着物に結い上げられた白髪の手をした大きな木箱を背負った人型を見つける。

「すみませーん！ 薬屋さんですよね？」

声をかけると彼女は振り返る。その顔には狐のお面をつけていて、表情はうかがえない。

「ああ、ロウさん。こんにちは」

「こんにちは」

「もしかして今は見回りをしていたんですか？」

「ああ、いや。今日はオリと朝から作業してて。今から薬屋さんをオリのところまで案内しますよ」

「お願いします」

薬屋さんと俺、二人で並んでゆつくりと歩きだす。薬屋さんは歩幅が小さいのでそれに合わせて歩みを進める。

薬屋さんは定期的にこの山に訪れ、オリに会いに来る。実際にオリがどんなやり取りをしているかわからないが、いつも家の戸棚に薬が置いてあるのできつと足りなくなつた薬を買い足しているのだろう。彼女以外にここに来る人はほとんどいないのもしかしたらほかの日用品も彼女から買っているかもしれない。彼女と言っているが薬屋さんは性別がわからない。見た目は完全に女性だが、声は中世的で男ともとれる。前に一度性別を聞いたことがあるが、静かにただ微笑みただけだ。オリも彼女のことについてはあまり知らないらしい。その謎は日々深まっている。

「着きました。あそこにオリがいますよ。おーい、オリ！ 薬屋さんが来たぞ

ー！！」

「ロウ、薬屋さんのお迎え行つたの？ ありがとうね」

「ああ、さっきなんか音がしたから見に行つただけだ」

「私が山を登っていたところをロウさんが見つけてくださったんです」

「そうだったんですか。じゃあいったん家に帰ってからでいいですか？」

「はい」

そういうと二人は家の方向へ歩いていく。俺は一人でいても暇なのでせっかくだしこのまま山の見回りでもしようと思いきり出す。

もう夕日はほぼ沈みかけている。早めに終わらせよう。

夕飯を食べ終わり、居間でぐったりする。昨日のように夜に外出することはめつたになく、これがいつもの過ごし方だ。

「いやあこれは明日一日中雨が降りそうだね」

「え、まじ？ 明日ずっと中で過ごすのかよ」

「まあ仕方ないね。ここしばらく雨降ってなかったし、いいことなんじゃない？」
「確かにそうかもな」

俺は家の中に入り込んできた蜘蛛の行く手を阻む遊びを始める。しばらくするとオリにそれが見つかってその蜘蛛は外に出されてしまう。なんて悲しいことだろうか。

夜中、屋根を何かが強く打ち付けられる音で俺は目を覚ます。オリは俺よりも少し早く目が覚めたらしく、既に体を起こしていた。俺もそれにつられて体を起こす。

「オリ、どうかしたか？」

「いや、雨脚が強くなって」

「それがどうかしたか？ これくらいたまにあるだろ」

「なんか嫌な予感がするんだよね。これから大雨が降りそうな気がする」

「なるほどな。お前の勘がそう言っているならそうなるな」

「もしかしたらこの山も大変なことになるかもしれない」

「了解。じゃあ外行くか」

気づけば俺たちはいつもの服に着替え、顔には面布がかかっている。

「そうしたらロウは山の反対側の方見えてきて。道に迷うことはないと思うけど何か事故があったらここ集合で。何もなかったら山の反対側で」

「分かった」

家の扉を開けると、雨はさつき起きた時よりも強くなってきた。

「これは確かにすごいことになりそうだな」

「でしょ？ じゃあまたあとで。」

「ああ」

そういつて俺たちはそれぞれ反対の方向へ駆け出す。

雨が強くなると地中でぬくぬくしていた妖怪たちに刺激が与えられ、地上で悪さをする可能性がある。それを阻止することと、この山が崩れたりしないのか見るため今こうやって見回りをしている。こちらは人間が住んでいる町に近い方だ。

山を下がりながら見回りをしているうちに雨に加えて、風も強くなってくる。今までで経験したことがないくらいの雨風だ。早く見回りを終わらせて帰ろう。オリは大丈夫だろうか。

見回りをしてからしばらく、俺が見回る範囲の約半分が終わった。妖怪のようなものや人間も全く見受けられず、ただただ雨風が強くなるだけだ。服はもちろぬずぶぬれで、足元もかなりぬかるんできてもういつもの様には走れない。足元に気を付けながら山を下る。少しへこんでいた場所は川の様になっている。あそこに足を踏み入れたらたまったもんじゃやない。

「うわ……なんだこれ……………」
進むうとした道の先が崩れ落ちている。飛び降りることも可能だが、この地面だと着地したときに足を踏み外してしまうかもしれない。隣にある木が生い茂っている場所を進む。足を置く場所が小さくこの道もなかなか進みづらい。さつきよりもゆつくりと歩みを進める。

だいぶ下に降りてきた。もうそろそろオリとも会えるだろう。道はもうほぼ平らになり人家も見え始める。こころ辺を少し回って、もう家に帰ろう。

そう思った時、突然体のバランスが崩れ始める。どうやら左足の部分の地面が崩れたらしいと瞬時に理解する。どうしてこんな時に限って頭の回転が速いのだろうか。近くの木をつかもうとしたが雨で滑ってしまいうまくつかめない。頭から地面に向かう。これはかなり大変な怪我をしそうだ。思わず目をつむる。

でも、体が痛みを感じることはなかった。どうやらあいつが腕をつかんでくれたらしい。俺は目を開け、上を向きながら声をかける。

「オリ、ありがとう。おかげで助かった」

「大丈夫ですか！　こんなところで何してるんです!!……　ってもしかしてあんたあの時の」

「はああ??」

俺にかけられた声は予想していたものと全く違い、女の子のしかもどこかで聞いたことがあるものだった。脳の思考がいったん止まる。

「お前つてもしかして……」

「やっぱりそうだよね！　おとといのお祭りで私を助けてくれた……!」

「まじかよ……」

その子はいこの間の祭りで助けたあの女の子だった。まさかこんなところ

で会うなんて。

「助けてくれたのは感謝するけどお前こんなところで何してるんだ？ 俺みたいに転んだりするぞ」

「え？ だってこの雨で山が崩れそうだって聞いてここからすぐそこに住んでるおばあちゃんを迎えに行こうとしたときにたまたまあんたを見つけて。それで来たらちょうど転びそうになってたから手をつかんだの。良かった間に合って。下手したこのまま下まで転げ落ちるかもしれないよ」

「そうだったのか。本当にありがとな」

俺はそういつて立ち上がる。

「じゃああんたも早くここから避難して私の家まで来て」

「は？ 俺はお前の家にはいかない。そこでオリとも待ち合わせしてるし」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ。そのオリって人が誰かは知らないけどさつきみたいにこの山で土砂崩れが起きるかもしれないのよ！ さあ早く！」

「ちよつと待てよ！ 俺の家は上にあるし、それに俺はお前ら人間と一緒に過ごすようなものじゃないんだ！！」

「はあ!? それじゃあ何なのよあんたは！ あんたは人間じゃなかったら何なの？ この前言ってたやばいもの？ それとも妖怪か何か？」

「えっ……………」

突然言葉が出なくなる。俺は人間でもなければ妖怪でもない。人間に捨てられ、妖怪たちに育てられたもの。人間を嫌い、いらない妖怪を殺しこの山の秩序を守るもの。どちらの存在からも敬遠されているものだ。

「俺は……」

「何よあんた急にどうしたの？ もしかして自分が何かわからないの？」

「……………」

「でも今はそんな話してる場合じゃないの。早く下へ降りるわよ！ あなただけでも！」

「…… 分かった。でのその前にオリ…… 俺の大切な人だけ一緒に行ってもいいか？ お前は先にそのおばあさんと下にいてもいいから」

「いいよ。でもその子とあつたらすぐに下に降りてきてね。私は下の安全な所で待ってるから。雨が止んだら帰ってもいいから。分かった？」

「…… ああ。じゃあ後で」

そうして俺はオリがいるであろう集合地点に向かった。

歩きながら考える。俺はいったい何なんだ？ オリは人間でも妖怪でもないものだとよく誰かに説明している。でも本当は何なのか。俺は小さい頃、きっと

生まれてからすぐにこの山に捨てられた。オリも同じころに捨てられ、俺たちは運がいいことに妖怪に食われる前に心優しい妖怪に保護され育てられてきた。その妖怪の顔はあまり覚えていないが、オリがずっと隣にいたのは記憶の中にこびりついている。いつしか俺たちは二人で過すようになり、今のよう山の見回りを始めていた。

思えば、今までの記憶はかなり曖昧になっている。確かに小さい頃の記憶はあまりないが、それにしても今までに出会った妖怪や俺たちの手助けをしてくれた人についての記憶が著しく少ない。育ててくれたはずのその妖怪の記憶に至っては思い出せることが何もなくなっている。覚えていることといえば昔からずっと妖術のように教え込まれてきたあの言葉だけだ。ずっと育てられているのならもつと何か覚えているはずだ。誰かに偽られているのだろうか。俺の周りに嘘つきなんていたか？

そして人間の子に生まれた俺は人間という括りに入るのだろうか。そもそも人間の定義とは？ 妖怪とは何をもって妖怪とする？

考えていけば考えていくほど、俺は「俺」という存在がわからなくなっていく。俺はどうやってここまで生きてきた？ 俺が見てきたものは全て真実なのか？ 俺は本当にここにいていいのか？

「俺」は…… 誰だ？

気が付くと俺はオリとの約束した場所のすぐそばまで来ていた。いろいろなことを考えていたせいでここまでどうやって来たのかあまり覚えていない。ただ、雨はずっと同じ強さで降っているが風は時寄り立てなくなるほどのものが吹くくらい強さが増している。何とか木などにつかまりながらここまで来たらしい。おかげで手は擦り傷だらけだ。傷口に雨が入って痛い。

耳を澄ますと、遠くから誰かが大声をあげているのがわかる。声からしてオリが俺を呼んでいるのだろう。俺はその方向に向かって斜面を登る。

「あ！ ロウいた！ いやあこの雨すごいねえ、なんも怪我しなかった？」

「あ、ああ。ちよつと風が強くて木につかまってたら手に擦り傷ができたけど大丈夫だ」

「そう？ じゃあ上に帰ろうか。流石に僕たちもずっと外に出てたら怪我とか

しそうだし」

そういつてオリは上に向かつて歩き出す。それを見上げながら俺は口を開く。この雨が終わる前にこの難題を解決させよう。

「あのさ、オリ、ちよつと話したいことがあるんだけど」

「ええ？ それって家でじゃなきゃダメ？」

「いや、今がいい」

「そっかあならあその洞穴みたいなどころですか？」

オリが指さした先には俺たちがちよつと立ってはいれるくらいの洞穴のようなものがあつた。あそこなら多少は雨風がしのげそう。二人でその中に入る。

中に入り外を見る。心なしか、風はさつきに比べて弱くなってきている気がする。

「にしてもすごい雨だよねえ」

オリが口を開く。あいつはその長い前髪の下で何を思っているんだろうか。

「そうだな……」

「で、話つて？」

「……なあ、『俺たち』って何なんだ？」

「何それ、急にそんなこと言いだしてどうしたの？」

「いいから早く答えろ」

「うん。人間でも妖怪でもないもの、だよ？ いつも僕がそう言ってるの聞いてるでしょ？」

「そういうことじゃなくてもつとこう、はつきりしたことを言っほしくて……」

……

「ええ？ 急にそんなこと言われてもなあ。僕らはこの山を守るもので妖怪ではない。でも人間みたいに町や村で暮らさず、ここで二人だけで生活している……妖怪に認められた人間、みたいなの？」

そういつてオリはこちらを向いて笑う。いつもあいつはそんな表情をしてはぐらかす。そんなオリを見てみると、だんだん腹立たしくなってくる。

「じゃあさ、俺たちってこの先も二人で過ごしていくのか？ 妖怪たちに追いつ出されたりしても？ この山が無くなっても？ そしたら俺たちは人間が住む場所で過ごしていくのか？ そんなのできないだろ。俺たちは俺たち以外に頼れる人間なんていない。そうだろ？ なあ」

「ちよつとロウ、急にどうしたの？ なんかロウさつきからおかしいよ？ 急にここからいなくなった時の話なんかして。それにそんなこと今話さなくてもいいじゃん。早く帰ろうよ。また風も強くなってきたるし……」

「俺の質問に答えろよ!!」

腹よりもっと、もつと深いところから声が出る。前が見えなくなる。自分の声だけが世界に響く。それでもオリに自分の声を投げつける。

「お前は大切なときいつもそうやって話を逸らそうとする！前に俺が昔のこと聞いた時も笑って誤魔化していたじゃないか！ちゃんと答えろよ！俺たちはどうしてここにいるんだ？誰から生まれた？誰に育ててもらった？どうやって今まで生きてきた？『俺たち』は誰なんだ？なあ!!」

「ロウ！君本当におかしいって！しっかりしてよ！」

オリが俺の肩を強くつかみ、前後に揺らしているのが感じられる。風がまた強くなり穴の中にいる俺たちの髪をも揺らす。俺は掴まれた手を振り払いまたしゃべりだす。この口は止まらない。

「ちゃんとこつちを向けよ!! お前何か隠してるだろ！俺たち自身のことになるとなんで何も答えないんだ！俺はお前と正面から過ごしてるんだよ！なのにお前は正面から俺を見てない！お前もちゃんと前を向けよ！俺から目を逸らすなよ!!俺は……俺は、お前と普通に過ごしていたいだけに……!!」

いつの間にか目から大粒の涙があふれ、流れ出ていた。涙は雨と混ざり地面に落ちていく。いつの間にか自分の本音が漏れ出ていた。俺の中にずっと引つかかっていたものはこれなのか。俺が言いたかったことは。そう気づくとまた涙が頬を伝う。鼻の奥が熱い。

「……なあ、オリ。お前は何を隠してるんだ？……『俺たち』は誰、なんだ？」

喉の奥から絞り出した声が出る。涙は一向に止まらない。それでも前を向くとオリは下を向いている。その表情は口元まで前髪で隠れているため一切読めない。でもその手はかすかに震えているのがわかる。

しばらくしてオリは一度深呼吸すると、顔を上げ俺のことをまっすぐ見る。

「ロウ、君は人間だよ」

「……お前は？じゃあ、『お前』は誰なんだ？」

「僕は神様、だよ」

オリは笑顔でそう言った。

「……冗談はやめてくれよ」

「冗談じゃないよ。僕はこの山を守る神木に宿った風神、そしてこの山を統べるものだ」

「そんな……急に言われても」

神様なんて言われても脳の処理が追い付かない。オリは俺とずっと一緒に過ごして、成長してきたんじゃないのか？

「僕はもともとあの上にある木に宿る神様なんだ。それで昔からたまに人間に

化けて遊んでた。そしたらたまたま森の中に捨てられていた赤子を見つけた」
「それが……俺？」

「そう。その時ものすごく暇だったからその子を育ててみることにした。でもまあ人間の子供なんて育てるの初めてだったからいろいろと苦戦したけどね。周りの妖怪に頼りながら育てた。でもあるときずっと助けてくれた妖怪が死んじゃってね。ロウが三歳くらいの時かな？ それで僕だけで育てることにしたんだ」

「じゃあ俺が物心ついた時からお前と一緒に成長してきたっていう記憶は？」

「それは僕もロウと同じ目線で生活したいな〜って思ったから妖術がかかった薬で自分の姿を変えてた。でも人間での本当の姿はこれ。何百年も前から人間の時はこの姿になる」

「なる……ほど？」

「ああ、やつぱりこんな一気に話しても理解できないよね。ちなみにその薬を届けてくれるのがあの狐面の薬屋」

次から次へと新しい情報が入ってくる。それを一つずつ噛み砕き理解していく。

「う〜ん、とりあえず俺の生い立ちにはわかった」

「ほかに聞きたいことある？」

「いや、今は特に……」

「……ごめんね。今まで隠してて。ロウに僕の正体知られたらいいことないって思ってたから。でも納得してくれたみたいで良かった」
オリがほほ笑む。

「当たり前だろ。一応ずっと一緒に育ってきたんだから。さつきは勢いであんなこと言ったけど俺はオリを信頼してるから」

「ふふ、ありがと」

「いやあ神様と友達なんて俺もなかなかだよなあ」

「ちよつと、そんな風に神様を扱わないでよ！」

そういつて俺たちは二人で笑った。この安心感、久しぶりな気がする。そうしているうちに、俺は大切なことを思い出す。

「あ、そうだ！おいオリ、この雨で山が崩れるかもしれないらしいんだ」

「ああ、やつぱり？ なんとなく僕も感付いてたんだよね。というか何でそんなことがわかったの？」

「さつき下に見に行った時、祭りの時の女に会ったんだ。それで、この雨がやばいってことを知った。その時俺もこの山から下りろって言われたんだ。だからオリ、一緒に人間が住む町へ逃げよう」

「人間じゃないものと一緒に行ってもいいの？」

「お前さつき俺のことを人間って言っただろ？俺は人間でその人間の大切な人だから連れて行くに決まってるだろ。大切な人に人間も神様も関係ない。早くいくぞ」

俺はオリの腕をつかみ外へ出る。オリは何も応えず一緒に外に出る。風は完全に止んだみたいだが、雨の勢いはさつきまでとそこまで変わっていない。かすかに東の空が明るくなってきた気がする。大粒の雨が俺たちの体をたたたく。

「……いよいよこれは大変なことになりそうだね」

「ああ。早く下まで降りないと」

俺たちはゆっくりと斜面を下る。いくつかの木はこの雨で地面が柔らかくなったせいか倒れている。地面もかなり柔らかく、泥のようになってしまっているところもある。

しばらく進んでいくと、さつき通ったなだらかな場所に着いた。

「やっぱりの女はいないな。先に下に行ったっぽいな」

言いながら後ろを振り向く。するとそこにオリはいなかった。慌てて辺りを見渡すと、向こうの方でオリが立ち尽くしていた。

「？おいオリどうしたんだよ。早くいくぞ」

声をかけてもオリは何も応えない。不審に思い俺はオリのもとへ行く。

「オリ、何かあったのか？」

「……いやあやっぱり僕はこれ以上行けないや」

「は？なんだよ急に『行けない』って」

オリの声は明らかに震えていた。泣いているのだろうか。涙は雨と混じり見えない。

「僕の本体は山の上にある御神木って言ったでしょ？」

オリは取り繕ったような笑顔でそう言う。

「それでこの人間の皮は本体じゃないんだ。この体が本体から離れて遠くに行くことはできないんだ」

「それって、つまり……」

「そう、僕はここから一步も前に行けない。……僕がこの山から出ることはできないんだ」

さつきあんなに泣いたはずなのに、また目から涙が出てくる。オリもきつと同じだろう。口元はかすかに笑っているが、その感情を隠しきれていない。

「嘘、だろ？」

「残念ながら嘘じゃないよ。ごめんね。……ここでお別れだ」

『ごめんね』と絞り出した声が聞こえる。

「嫌だ！じゃあ俺もここに残る。お前が行かないのなら俺もここにいます！」

「それは無理だつて君もわかってるでしょ？ この雨でだいぶ地盤が緩んでい
る。このままだと上に戻る間に土砂崩れが起きる。僕は本体に戻るのはすぐに
できるけど、ロウはその土砂崩れに巻き込まれて命を落とす可能性が大きい。
もし雨がやんだとしてもこの状況は変わらない。絶対に逃げた方がいい」

「そんな…… でも…… でも！」

何でこんなに、こんなにも不幸なことが起こってしまうんだろう。そして自分
何もできないことが思いつかないことが何よりも憎い。

「これは僕からの最後のお願ひ」

「…… さい ……ご ……！」

突然思い出す。ずっと頭から抜けていたこと。昔から聞かされていたこと。小
さなころの記憶で唯一残っているもの。

「…… 『俺たちが人間と深く接触したら、もう二度とここには戻れない』」

「覚えてた、ね。そうだよ、僕らはもう会えない」

「そんなの…… そんなの嫌だ…… 俺は、俺たちはもつと……」

もつとずっと一緒にいたい。いつものように二人で駄弁りながらこの山を見回
つて、一緒に飯を食つて、けんかをして、そして一緒に笑いたい。いつもの日常
を過ごしたい。ただそれだけなのに。

「残念ながら僕は全知全能の神じゃない。君が生きるためにはこれしか手段が
ないんだ。…… 本当にごめんね」

「…… ああもう謝るのはやめようぜ。わかったから。決めたよ、俺はこれ
から人間と生きていく」

「ロウ……」

「だからさ、泣くのはもうやめようぜ。笑って別れよう、な？」

そう言つて俺は涙をぬぐう。そういえば、雨足がだいぶ弱くなっている。

「そうだね。いつもみたいに笑つてお別れしよう」

オリはもう涙は止まっているらしい。まったく切り替えが早いやつだ。

「にしても人間と生きていく決断をするなんてオリも成長したよなあ。小さい
頃は僕から全然離れようとしなかったのに」

「うるせえな。そんなこと言われたら恥ずかしくなるだろ」

「ふふっ恥ずかしがってる……」

「やめろよ！」

最後までこいつ、俺をからかってくる。

「あれ、雨やんだ？」

オリと俺は同時に空を見上げる。

「ほんとだ……」

「もう朝だね。流石にあの女の子が呼びに来るんじゃない？」

「確かにそうだな。何か声が聞こえる」

遠くからの女性の声を耳が捕らえる。

「もうそろそろお別れかな」

「ああ。今までありがとな。お前と一緒にいられてよかったよ」

「そんな急に謝らないでよ。いつも通りやろうって言ったばっかじゃん」

「確かにそうだな。……！」

いきなりオリが俺に抱き着いてくる。何故か心も体もとても暖かくなる。

「ちよっ！ 急にどうしたんだよ！」

「だってもうロウと会えないじゃん！ だから最後くらいいいでしょ」

「はあ、お前本当に……」

しばらくしてオリは俺から離れる。

「ふう、これでもう思い残すことはないや」

「逆に言うとこれが思い残したことなのか……」

「さ、ロウ行つてらっしゃい。もう会えなくなっても僕からは見えてるから勇気出して」

「…… 分かった。俺も金持ちになったらここに神社でも建てるよ」

「うん。楽しみにしてる」

「じゃあな！ 今までほんとにありがとう」

「こちらこそ楽しい毎日をありがとう。じゃあね」

俺はオリに背を向けて歩き出す。朝日がまぶしい。これからどんなことが起きるのだろうか。きつとどんなことが起きても俺は、俺とオリは真っ直ぐ突き進んでいけるだろう。

しばらくしたところで、ふつと後ろを振り返る。オリはそこに静かに立っていて、何か言葉を発する。

「何を言っているのかはわからない。でも優しい表情をしているのは感じ取れた。やがて強い向かい風が吹き俺は目をつむる。再び目を開くとそこにはもう、オリはいなかった。」